

には蒸気機関が可能にした電灯の光の下での新たな生活様式など、挙げていけばきりがないさまざまなことが関わっている。

4. 二元論からの逃走

話を元に戻すならば、資源とは視角によっては人の外にある客体であり、見方を変えれば「我有り」という「私」の外にある身体、知識、技、道具、原料であり、またべつの視角では、これらのものと人が結びついた、人をふくむシステムが資源である。ここで言うシステムとは、資源の分類表の項目として人をふくむような分類学の提唱ではない。ある視角では、客体としての資源とそれを用いるエージェントという図式にまとめられるような要素と関係が、べつの視角ではそれ自体ひとつの資源単位としてべつのエージェントを要請する入れ子構造であり、その全体を描いていけば、資源とエージェントという対立図式自体の見直しが必然化するようなシステムを考えることである。上記の過程2についてもおなじことが言える。労働者にとって自分の技、工具、原材料などが資源であるとすれば、個々の製造業者にとって技を身につけた労働者は生産の一資源であり、さらに親請けや商人にとって労働者をかかえ生産を行う製造業者は資源であり、こうした入れ子構造はさらにどこまでも広がっていく。人がものに対し働きかけることもあれば、そうした構図全体がものとして現れることもあり、こうした関係を往復的に検討していくうちに、人との二元論が揺らいでいく。

このように人、もの、資源を考えていくのは、マルクスとエンゲルスが『ドイツ・イデオロギー』において語った出発点におくべき現実的諸前提、すなわち「現実の諸個人、その諸活動とかれらが生きる物質的諸条件、かれらがすでにあるものとして見いだす諸条件とかれらの活動が生み出す諸条件」と、おなじことを言っているのかも知れない。資源と人類について考えていくと、160年前の初期マルクスに戻ってしまうというのは、必要なことでありただの先祖帰りはあるまい。哲学は私の商売道具ではない。資源概念を考える時、私の出発点にあるのは手仕事の労働であり、より具体的にはインドネシアのいわゆる「伝統染織」のひとつパティック（ジャワ更紗）の生産に、賃労働者として、あるいは家内請負仕事としてかかわる女性たち、その技、仕事、労働組織、コミュニティーである。工芸の伝統技能を物神化に陥らずに論ずるためには、以上に述べたような資源ともの見方が有効である。

福島真人 2001 『暗黙知の解剖—認知と社会のインターフェイス』金子書房。

Moeran, Brian. 1997. *Folk Art Potters of Japan: Beyond an Anthropology of Aesthetics*. Curzon.

資源のダイナミズム — 誕生から崩壊、そして再生

菅 豊

東京大学東洋文化研究所

(B01 認知・加工班)

キーワード：プレ資源、資源化、制度的取り決め (Institutional arrangement)、非資源化、再資源化

はじめに

「資源」は所与の存在ではない。「資源」はあくまで概念であり、人間の認識に基づく位置づけ・意味づけなくして「資源」は存在しない。つまり、主体としての人間と、客体としてのものやこととの関係性によって括り取られ、思惟によって加工された結果「資源」と表現されるのである。その関係性は、人間にとっての有用性⁽¹⁾によってほぼ規定されるようである。

従来、「資源」という言葉によって、植物や動物、鉱物資源、大気、水など可視的、物質的なものが主として表現されてきた。それらは人間に認識、利用されることによって価値を付与され、「資源」という特別な位置づけがなされてきた。ときに「天然資源」、あるいは「自然資源」と表現されることもあるが、その意味は「自然界に存在する物理的、物質的、可視的な有益なもの」という単純な意味しかもたない。しかし、そういう自然物以外にも人間は価値を見出し、また生み出して、利用してきた。その対象は、やはり「資源」と語られてしかるべきものである。それは「文化資源」と表現されるものであり、ときに「自然資源」と連絡を保つことはあるにしても、おおかた「人工的に生み出された非物理的、非物質的、不可視的なこと」と考えられる。それは、具体的には、情報や技術、組織というかたちで表出している。

「資源」をこういう意味付与の産物としてとらえるとき、「資源」の存在形態は、以下の五つのステージのように、その誕生から崩壊、そして再生といった連続したダイナミックな運動態として把握することができる。

1. 第1ステージ—「プレ資源」—

「資源」を考える上で、まず、ものやことの「資源」以前の姿や状況が想定されるであろう。この段階は、「プレ資源」のステージと表現して良い。ものやことが、いわゆる所与の存在であり、人間と関わらない、あるいは関わっていること、有益であることを認識されていない段階にあると、それは「資源」として人類によって位置づけられることはない。それはそのものやことにたいして単純に人間の関心が存在しなかったためか、あるいは、それらへアプローチする技術が未熟であったために、人類にとっての有用性が生み出されない、あるいはそれを認識されない段階であり、その結果、「資源」として包括されることはなかったのである。現時点の地球上においても、「資源」と認識されて

いないものやことは未だ相当数あるはずである。人類はそのようなもののなかに次々と有用性を見出し、「資源」として位置づけてきたのである。この「プレ資源」のステージにおいて、ものやことは単純に有用性がないのではなく、その秘めたる有用性が未だ理解されていないだけであることが、存外に多いことに注意を払わなければならない。

2. 第2ステージ「資源化」

次に想定されるのは、「資源化」のステージである。人類はある対象に有用性を認めると、従来とは異なった濃密な関係をその対象と結び結ぶ。有用性を認め、実際に利用可能とする、すなわち「資源」として認知されていないものやことを「資源」へと変換する行為と、そのプロセスが「資源化」である。すべての「資源」が、この「資源化」のプロセスを経て、無価値、無認識のものやことから、資源価値を付加されて「資源」へと変換されたのである。その際、付加される資源価値は、ただ一つである必要はない。互いの価値が決定的に矛盾したり、抵触したりしない限り、さまざまな価値が、一つのものやことに付与されることがあり得る。

たとえば、河川。河川にある水は直接の飲料水として、多くの地域の人間生活において必要不可欠の「資源」とされるが、それはまた、食料としての作物や家畜を栽培、飼育するために重要な「資源」である。また、水車などによって、エネルギーとして変換される「資源」でもある。さらに舟運など交通を可能にする「資源」でもある。水は、多面的な資源価値を有するが、それぞれの資源価値が、まったく他の資源価値と関わらないか、あるいはそれぞれが折り合いをつけられながら利用されている⁽²⁾。

さて、この「資源化」のプロセスに必要な不可欠なのが「資源化」の技術である。人類はさまざまな技術のイノベーションによって、「資源化」を可能にしてきた。先に述べた河川の水の場合、それを栽培に用いるためには灌漑技術が必要であるし、エネルギーとして使うには単純でも水車の技術が必要である。交通路として使うには船の製作と操船技術が欠かせない。そのような技術のイノベーションが起こって、はじめて水は「資源」として認識されたのである。そして、河川は水という「資源」を提供することで、早くからその資源価値が高く評価されてきたのである。

3. 第3ステージ「資源維持」

「資源化」に引き続いて、次に「資源維持」のステージが想定される。それは、「資源」を利用する段階であり、「資源」そのものではなく「資源」を取り巻くバックグラウンドがより複雑化するプロセスである。「資源」の資源価値が高ければ高いほど、その「資源」を利用するユーザーは増加し、利用の頻度は上昇する。そうすると、その「資源」をめぐる葛藤、軋轢、紛争などという「資源」を取り巻く人間間の緊張が発生する。とくに「自然資源」の多くは決定的に控除可能性 (subtractability)⁽³⁾ をもつため、「資源」をめぐる競争性が露呈するのである。手際の悪い社会では、そういう緊張を解きほぐす、あるいは生み出さないための仕組みや技術を編み出している。たとえば、共有資源管理 (CPRM) に代表される所有や利用に関わる制度的取り決め (Institutional arrangement) は、そのよ

うな仕組みの一つといえる。

「資源」は人間によって括り取られる客体であるが、ひとたび「資源化」されると主体である人間に組織化などの影響を与える。「資源化」が、人類とものやこととの関係性に分析の比重がよりかけられるのに対し、「資源維持」の段階は、人間と人間の関係性にこそ相対的に多くの比重がかけられる。つまり、「資源化」が進行することにより、人間関係や、社会構造は変えられるのである。

しかし、「資源維持」にどんなに工夫を凝らしたところで、「資源」が決定的に更新可能性 (renewability)⁽⁴⁾ をもたない場合、その「資源」が最終的に量的に枯渇する運命は変えられない。「資源」の減少は、市場経済など交換システムの発達した社会において、その「資源」の一時的な価値の上昇をもたらすこともあるが、最終的に量的枯渇は、「資源」としての価値を失わせる。このように「資源」としての価値が減衰していくプロセスを、第4ステージ「非資源化」としてとらえたい。

4. 第4ステージ「非資源化」

「非資源化」は、ある特定の「資源」については、使用が枯渇に直結するという運命的な不可避の性質によって、まず引き起こされる。たとえば、鉱物資源は、人類史の時間において決して再生しないため、使用を継続すれば遅かれ早かれ必ず枯渇し、「資源」ではなくなる。一方、生物資源は、その利用が適切な度合いで行われているうちは更新可能である。したがって、「資源維持」の期間の長短、あるいは持続性—言い換えると「非資源化」に直面する可能性やそれまでの所要時間—は、基本的には更新可能性といった「資源」の本源的性質に左右される。

ところが、「非資源化」はさらに、その「資源」自身の問題ではなく、他の「資源」との相対的な力関係の変化によってもたらされることも頻繁にある。たとえば、エネルギーという機能を「資源」に求める場合、古くは草木に始まり、さらに発展して化石燃料の石炭、石油、原子力のウラン…と移り変わり、とって代わられてきた。新しい技術の発展、それにともなう「資源」の発見によって、同じ機能の資源価値をもつものは競合関係に位置づけられ、多様な観点から比較されて優劣、勝ち負けが最終的に判断される。敗者は量的に枯渇していないにもかかわらず、「資源」としては劣化、陳腐化しており、「非資源化」の道筋を辿り人々から省みられなくなる。「資源化」の背景では、「非資源化」が同時並列的に起こっているのである。新しい「資源」の登場の裏で、古い「資源」が退場しているのである。

しかし、この「非資源化」したものやことが、すべて人類との関わりを失うのかといえば、そうではない。集団や個人のアイデンティティに「資源」が関わるとき、その経済性をネグレクトしてまで優先する別の資源価値として、そのようなアイデンティティを位置づけ、あえて意図的にその命脈を保つこともある。さらに、一度、「非資源化」され、完全に資源的な価値が失われたとしても、それが再び資源価値を見出され、脚光を浴びる例も少なくない。この「資源」の再生の段階を、第5ステージ「再資源化」としてとらえたい。

5. 第5ステージ「再資源化」

たとえば、多様な動植物を育む森林⁽⁶⁾。森林は伝統社会において、木材や狩猟獣という重要な「資源」を供給してきた。人類は、早くから森林の動植物に有用性を見出し、「資源」として位置づけてきたのである。しかし、そのような森林の資源価値は現代社会において、重要性を決定的に減衰させられている。

日本において森林から産出される木材は、輸入材の流入によってその利用が経済的に成り立たなくなっている。また、森林に生存する狩猟対象鳥獣もまた、その利用は衰えつつある。すなわち森林は古い「資源」観に立脚すれば、その「資源」としての価値は減衰していることになる。

ところが、一方で、現代社会において森林に新しい資源価値が付与されている。たとえば、それは洪水防止機能であったり、二酸化炭素吸収機能であったりする。森林の保水能力保全は、ダム建設に置き換えられるということで、その安易な破壊は戒められ、荒廃した森林の再生が促されている。この洪水防止機能は、ダムと対蹠的な位置を占めることによって森林の資源価値として現代社会では認識されたのである。二酸化炭素吸収機能も同様に、現代において見出された森林の資源価値である。二酸化炭素など温暖化ガスの排出にともなう地球温暖化は、現在、国境を越えて深刻な問題となっているが、その防止策の一環として温暖化ガス排出権を明確にし、経済的に交換可能なものとして割り当てる方策がとられている。その一部として、森林のガス吸収力を権利として認め、交換可能なグローバルな「財」として位置づける方向性も見受けられる。

このような森林のもつ能力は、森林の本来もつ能力であり、近年、森林が獲得した能力ではない。近年、人類がその能力を「資源」として認識した、いわゆる「資源化」しただけのことである。保水能力や二酸化炭素吸収能力を把握する技術が発達し、そういう能力に経済的な価値を付与する技術が新しく開発されたのであり、その結果、森林が新しい「資源」として多くの人間に認識された。このように一度「非資源化」したもののやことが、技術のブレーク・スルーによって「再資源化」して蘇ることもある。

「再資源化」は、なにも技術的なイノベーションのみに止まらない。人間自身の価値判断のイノベーションが、その「再資源化」を促すこともある。たとえば、「自然資源」を伝統的な技術で利用する産業は、近代化の影響を受けた当初は、生産の効率、利便性や近代的産物の目新しさなどに負け、衰退したものが多し。なかには、完全に消失してしまった伝統的産業と、その「資源」もある。しかし、逆に、その伝統性が現代において「資源」と化している例も少なからず見受けられる。近代に生み出された「資源」が、マスプロダクションをベースにして、その資源価値を高めていったのに対し、伝統的「資源」はその希少性や権威性を武器に「資源」として生き残る、あるいは「再資源化」されつつある。それが可能になるには、伝統的技術で利用される「資源」を、かつて存在していた時代とは別の価値判断基準で評価する思考の革新がなされなければならない。あえて高価で非効率なものやことを甘受する思考と精神が生まれたときに、それははじめて可能になるのである。

たとえば、フェア・トレードやスロー・フード、エコ・ツーリズム、さらに有機・無農薬栽培などさまざまなアクティビティーには、このような価値判断の回路の変更を戦略的に仕組み、「再資源化」

を促す仕掛けがなされている。

ただし、「再資源化」の際、第1ステージ「資源化」とまったく同じマテリアルが用いられていたとしても、「再資源化」の場合、マテリアル自身を「資源」へと変換させるのではなく、「資源化」を可能とした技術を「資源」へと変換させることに注意しなければならない。「資源化」の場合は、純粋にそのマテリアル自身が資源価値を有していたが、「再資源化」の場合は、マテリアルを「資源」へと変換する技術がさらに資源価値を有するようになったのである。

たとえば、パングラデシュの貧困農村部で伝統的手工業的に生産される綿衣料。これは、安価なマスプロダクションの衣料に比べ競争力が明らかに低い。そのため、一時期「非資源化」の憂き目にあったのだが、近年、フェア・トレードの産品として注目されることにより復活し、再び流通するようになった。そういうものを購入する先進国の人々は、単純に衣料としての使用価値に注目してそれを購入するのではない。それが衣料として作り上げられる伝統的加工技術と加工のプロセスから醸し出される伝統的テースト（風合い）にこそ注目し、価値を見出しているのである。それは単に可視的なデザインを問題にしているのではなく、その製品に付与された不可視の情報—伝統的技術によって作られたという—こそが、単価の高い綿衣料に価値をもたせる最も重要なファクターなのである。まったく同じものを工業産品として生産でき、また、それが伝統的手工業産品に比べどんなに安価であっても、フェア・トレードの支持者の食指は動かない。フェア・トレードの場合、伝統的技術には権威性や希少性という資源価値に加えて、さらに「衣料の安全性—環境や健康という「資源」—」や「社会的弱者の保護—正義という「資源」—」という現代的な大義も付加される点で、より複雑な「再資源化」がなされたと考えるべきである。

おわりに

以上のように、「資源」の存在形態を連続したダイナミックな運動態としてとらえるならば、「資源」は永久に不変なもの、固定的なものではなく、人類の認識や技術によっていかようにも変えられてきた、あるいは変えられるものなのであることが理解される。むしろ、現代において「資源」は創られるもの⁽⁶⁾であり、ときには作動的な操作が可能であると考えた方が良いでしょう。

註

(1) 有用性は、直接的には経済的価値で計られる場合が多いが、そのみならず宗教性、審美性も含めた抽象的価値—これときおり経済的に計られるが—も含んで考えなければならないであろう。

(2) ここに記述した水の多様な資源価値は確かに、互いに大きく抵触しない。しかし、「資源」の多様な価値が、ときには相互に矛盾し、相反する対蹠的位置づけをもつ場合もある。たとえば、河川の水域を工場排水などの有害物の「ゴミ溜め (sink)」に使うとしよう。有害物を排出する、あるいは貯蔵するスペースやシステムは現在重要な社会的意味をもった「資源」と化しているが、その資源価値は、水が保有する他の多くの資源価値を低減させる。その利用によって飲料、灌漑用水としての水の利用は制限される可能性があるのである。すなわち、水のもつ飲料水、灌漑用水としての資源価値と、「ゴミ溜め (sink)」

としての資源価値はトレード・オフの関係にあるといえる。

後述する森林についても同様のことがいえる。森林の木々は古くより木材として利用されることで資源価値を有してきた。最近では、森林に対し保水能力が期待され、それが「資源化」している。実は、この森林の用材林としての資源価値は、保水能力という新しい資源価値とはトレード・オフの関係にある。森林を用材林として利用することは、森林の保水能力を減少させるのである。この際、森林の保水能力が重要視される、つまりよりいっそうの資源価値が与えられた場合、用材林としての利用は差し控えられる、あるいは制限されることとなる。最終的には、「資源」としての潜在価値に用材としての利用が含まれるとしても、現実にはある森林からその「資源」利用とその技術が消失するのである。このように考えると、「資源化」を、単なる資源価値の拡大、あるいは新しい資源価値の付加ととらえてはならない。あるものの「資源化」によって、それに先行していた「資源」の資源価値が否定されることも十分にあり得るのである。「資源」のユーザーが独立的で、相互不干渉であればあるほど、その資源価値は対立的になると考えられる。

(3) 控除可能性 (subtractability) とは、ある者の資源の利用が、他者の持ち分を食いつぶすことが不可避な性質を意味する。たとえば、水や材木、魚などの利用は、多かれ少なかれ、常時、誰かが使用可能な合計から差し引かれる性質をもつ。したがって、それらの「資源」の消費は共同性と競争性を同時にもっている。この性質をもつ「資源」—大多数の「資源」がそうであるが—は、容易に過剰利用の問題に巻き込まれる。

(4) 鉱物資源や石油は、通常再生不可能な「資源」と考えられる。一方、生物資源は、少なくとも数ヶ月から数十年の単位で再生される。その生物資源もそれぞれの種の違いによって更新率 (replacement rate) は異なる。更新率の低い、すなわち再生するのに時間のかかるものは、その資源回復能力が大きくダメージを受けるまで、その過剰利用が気づかれないためより大きな問題となるであろう。

(5) 森林において、獲得物として人間と直接的に結びつく個々の動植物たちは「資源」そのものであり、資源単位 (resource units) と表現すべきものであり、一方、森林はそれらの「資源」を提供する全体系であり、資源系 (resource system) と表現すべきものである。資源単位は、ただ単純にそれぞれが単体で存立、成立してきたのではなく、ときにはそれぞれの資源単位が相互の存立、成立を支持し、あるいは規定しあって一定の系となる存在形態をもつ。当然のことながら、森林に住む動物は、そこに存在する植物を抜きにして生存し得ない。生物的な「資源」を考えると、相互連関を可能とする資源系のなかでそれらは存在できるのである。その場合、資源系は生態系をベースとしていると考えて良からう。

(6) 現代社会において、いわゆる「自然資源」の「資源化」よりも、むしろ「文化資源」の新しい「資源化」がより盛んになっている。たとえば、インターネットのドメイン配分や、携帯電話の着信音楽 (着メロ) などの情報分野をめぐるコンテンツの「資源化」は急速に進んでいる。新しい技術によってもたらされた「資源」は、さらに新しい技術や新しい「資源」を生み出し続けており、「資源」の現代的意味や生成過程は大きく変化している。その点において「自然資源」も、「文化資源」化しているといっても良いのかもしれない。

「自然資源」をどう定義するか？

曾我 亨

弘前大学人文学部

(B01 認知・加工班)

キーワード：自然資源、希少、競合、実践的状况、多義性、民族、所有

はじめに

私が調査している東アフリカの社会において何が「資源」なのかを考えると、食料となる家畜やその維持に関わる井戸や牧草地、畑や潜在的に畑となる空き地、家屋の材料となる植物などがあげられる。けれども彼らがこれらの「資源」を、私達が「資源」という言葉によって思い描くものと同じように見ているわけではないように思える。本小論では、ヒトと「資源」の関係に焦点をあてながら、私達と「資源」の関わり方と、彼らと「資源」の関わり方の違いをおおまかに描きだそうと思う。

関係性を表す言葉としての「資源」

「資源」という言葉は、一般的に、人間の活動および目的追求のため必要なモノ(対象)という意味で使われている。けれども「資源」という言葉は、ヒトとモノとの特殊な関係性を指す言葉として考えた方が良く思われる。

そもそも Resource という言葉がもちいられるようになったのは、産業社会が成立して以降のことである。Oxford English Dictionary によると Resource という語が最初にもちいられたのは 1611 年のことであり、中世には Resource という語は存在しなかった。産業社会が成立し、それまでとは異なった特殊な仕方ヒトがモノと関わるようになったとき、モノは突然「資源」であると見なされるようになったのである。この特殊な関わり方を、私は「対象化」という言葉で表したい。一般的に資源といえ、それは天然資源 (Natural Resources) を指してもちいられることが多いが、その一方で「人的資源」というようにモノ以外のものを指してもちいられることもある。この場合、それがモノであれヒトであれ、特殊な関わり方をすることができる対象として「対象化」され活用されるということが含意されているのである。

ここでいう「対象化」は、見知らぬ者どうしが相互依存関係にある近代の特質と強く関連した現象である。交通圏が限定されていた前近代とは異なり、交通圏が飛躍的に拡大し「専門家システム」によって他者と関係づけられた近代において、ヒトは、見知らぬ他者のためにひたすら生産を拡大していった。この過程で、モノは「対象化」され、大量に消費する資源として認識されていったのである。またヒトが資源として「対象化」されたのも近代化と強く関連している。国民国家が成立し、ヒトが人口として「対象化」されて初めてヒトは兵士として動員されたり、選挙に動員されたりする資源と